

関西学院大学 研究成果報告

2026年 3月 31日

関西学院大学 学長殿

所属：神学部
職名：准教授
氏名：橋本祐樹

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	☒ 特別研究期間 ☐ 自由研究期間 ☐ 大学共同研究 ☐ 個人特別研究費 ☐ 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	D・ボンヘッファーの実践神学とその射程に関する研究
研究実施場所	日本（自宅、研究室、研究出張先としてドイツ及びポーランド）
研究期間	2025年4月1日 ～ 2026年3月31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2025年度の研究課題は「D・ボンヘッファーの実践神学とその射程に関する研究」で総括できる。本報告でいう射程とは、ボンヘッファー神学を歴史的対象として叙述するだけでなく、そこから現代の教会実践へ接続しうる問いを抽出し、批判的に再構成する可能性を指す。本年度は、とりわけ二つの射程を意識した。第一に、牧師補研修所と牧師補の集いをめぐる史料検討を通して、現代の牧師養成（神学教育・霊性の形成・現場訓練）の再設計へ示唆を与える射程である（主として②、③）。第二に、現代の教会から距離を置く当事者の語りを実証的に扱うことで、信仰と共同性の再編をめぐる問題を、ボンヘッファーの成人性・自律性に関わる射程へ接続する試みである（主として④）。成果は訳書1点、論文2点、発表1件である。

①（訳書）C・ティーツ『ディートリヒ・ボンヘッファー：抵抗の神学者』（新教出版社、2025年11月）：現代の指導的なボンヘッファー研究者ティーツによるボンヘッファー伝を訳出した。本書は抵抗運動や殉教という物語に回収されがちなボンヘッファー像を相対化し、神学的思考の連続性と展開を史料に即して描く点に特徴がある。訳出に際しては読みやすさを確保しつつ、神学的ニュアンスが落ちやすい概念について、訳語選択により文脈を保持するよう努めた。特に、倫理や抵抗を抽象化せず、教会形成、礼

拝、説教、共同体生活、牧会的配慮といった実践の諸相の中で理解する見取り図が読者に伝わるよう配慮した。これによって、導入書としての可読性を保ちつつ、神学研究・教育の基盤となる参考文献として整備し、ボンヘッファー理解を実践神学という観点から再構成する入口を広げた。

②（論文）「実践神学と〈伝道者養成〉の視点から読むD・ボンヘッファー」『神学研究』（関西学院大学神学部、2026年3月）：ボンヘッファーによる非合法の牧師補研修所（1935-37）と、その閉鎖後に秘匿的形態で継続された牧師補の集い（1937-40）を対象に、これらを実践神学と〈伝道者養成〉の視点から総合的に検討した。〈伝道者養成〉を、神学校教育に限定されない形成過程として再定義し、霊的形成・共同体的実践・教会現場での実地訓練をも内包するものとして捉え直した。また研究史上、抵抗者像や倫理思想が前景化する一方で、牧師補養成とそれを支える実践神学的思索が相対的に周縁化されてきた経緯（史料状況・受容史）を整理し、本稿の課題設定の位置を明確化した。これによって牧師補養成を制度的代替や敬虔な共同生活に矮小化せず、教会闘争のただ中で教会が自らを保ち、整え、送り出すための教会形成の実践として再定位した点に研究史上の意義がある。制度的枠組みが揺らぐ現代において、神学教育・霊性形成・現場訓練をどう接合し直すかという牧師養成の課題に対し、歴史的事例を通じて再考への示唆を与えた。

③（論文）「D・ボンヘッファーの牧師補研修所の成立と霊的形成」『宣教学ジャーナル』（日本宣教学会、2026年6月、原稿提出済み）：ボンヘッファーによる1935-37年の牧師補研修所成立の歴史的条件と、そこで中核に置かれた霊的形成の内実を一次史料に即して分析した。焦点は、研修所が国家による教会支配への対抗策にとどまらず、「教会とは何か」という問いへの実践的回答として構想された点にある。霊的形成を内面的敬虔の強化へ還元せず、説教・礼拝・共同体生活・牧会実習を貫く生活の形式として捉え、形成が個人の信心の問題に閉じず、共同体の具体的形成と宣教的証言を支える力能へ及ぶことを明らかにした。これによって霊性と実践、知的形成と現場訓練が分断されやすい現代の牧師養成に対し、神の言葉の中心性のもとで形成を統合する視角を提示した。養成を職能訓練でも内面修養でもない、教会形成に奉仕する総合的営みとして捉え直す理論的基盤を補強した。

④（研究発表）「教会から離れるプロセスにおける解放と再編」（日本基督教学会近畿支部会、2026年3月）：本研究発表は、制度的教会に長期的・献身的に関与してきた当事者が、ある出来事を契機に教会から距離を置く経験を対象に、半構造化インタビュー計3回と自発的な追記テキストを資料として、帰納的な質的内容分析を行ったものである。分析の結果、当事者の距離化は単なる「離脱」や信仰喪失として一括りにできるものではなく、安全確保としての防衛的離脱、余白（時間・関係・自己決定）の回復、生活世界における信仰理解・他者および教会との関与・実践の選択的再配置という連鎖をもつプロセスとして整理された。教会からの距離化を個人の弱さや逸脱に還元せず、尊厳と安全、生活の主導権を回復しつつ信仰が再構成されていく過程として記述できる可能性を、現代の自律的・選択的な宗教性との関連において示した点に意義がある。考察においては共同体が「ホーム」であり続けるための実践課題を、安全、境界、余白という論点から提示した。尚、本発表を基に論文にする見通しである。

以上の通り、2025年度は、ボンヘッファーの実践神学研究を牧師養成への射程と成人性・自律性への射程で展開しつつ、訳書によって研究と教育の基盤整備も進めた。次年度は、牧師補養成史の検討を1937-40年へ拡張するとともに、質的内容分析を用いた他の事例研究と理論化を進め、両者を教会及び人の形成という主題との関連で深めたい。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

報告用紙②

- ◆ 研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。